

Title	歴史社会学における文化論的アプローチと段階論的アプローチ
Sub Title	The cultural approach and the evolutionary stage approach in historical sociology
Author	竹内, 治彦(Takeuchi, Haruhiko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1990
Jtitle	哲學 No.90 (1990. 6) ,p.73- 99
JaLC DOI	
Abstract	<p>社会史の流行がとりざたされるようになってから10年以上の歳月が過ぎようとしている。また近年、歴史的社会学(Historical Sociology)等の名称をかかげた雑誌が、とくに英語圏で発刊されている。それらに共通しているのは、歴史家サイドが、社会学ないし社会科学一般のもつ理論性や一般化に興味をもち、歴史学の可能性を拡げてゆこうとしていることである。ブローデル等の主張するような、歴史学を歴史的社会科学として再興しようとする姿勢がそれである。このような問題関心につきうごかされた歴史学の諸研究の業績は豊かなものであり、一定の影響をもつものに成長を遂げているように思われる。これに対し、社会学のサイドでは歴史的な資料活用の可能性をめぐる研究は残念ながら大きな潮流をなしているとはいいがたい。しかしながら、その研究がまったく途絶えているといえるものでもないし、近年、歴史学サイドの社会史の活動に触発されて、新しいアプローチを模索する研究も進んでいると考える。本稿では、そのような歴史社会学的研究を参照しながら、社会学に歴史的な観点を導入することによるメリットについて考えてみたい。そのさい、歴史社会学的研究を、研究対象の拡がりにしたがって、文化論的アプローチに区分する。さらに、この四つのアプローチのうち、歴史社会学の可能性をめぐる重点が、段階論的アプローチと文化論的アプローチの対比にあると主張し、そのうちでも文化論的アプローチのもつ二つの利点を強調してみたい。それは一つには、生活主体の側から、社会の歴史を再構成する可能性をもっていることであり、またもう一つには、かつて「近代化論の再興」が議論されたさいに問題となった伝統と近代の問題にたいし、文化論的アプローチが一つの解決を与えてゆく可能性をもっていることである。</p> <p>Historical sociology is discussed very energetically these days. But under this one name many approaches are taken, which makes confusion among scholars. In this paper four main types of historical sociology are discussed : (1) the social condition approach, (2) the approach of the theory of evolutionary stages, (3) the general theoretical approach and (4) the cultural approach. (1) the social condition approach is often taken in monographic studies that pay attention to individuality. (2) the approach of the theory of evolutionary stages deals with the social structures with theoretical foundations. (3) The general theoretical approach uses historical materials as examples only for theory-building. (4) The cultural approach emphasizes the effect of the past on present society. This paper also underlines the importance and usefulness of the cultural approach. It can reconstruct social theories according to the social outlook of common people who live everydaylives and revise the role of tradition in modernization.</p>
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000090-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

歴史社会学における文化論的 アプローチと段階論的アプローチ

竹 内 治 彦*

The Cultural Approach and the Evolutionary Stage Approach in Historical Sociology

Haruhiko Takeuchi

Historical sociology is discussed very energetically these days. But under this one name many approaches are taken, which makes confusion among scholars. In this paper four main types of historical sociology are discussed: (1) the social condition approach, (2) the approach of the theory of evolutionary stages, (3) the general theoretical approach and (4) the cultural approach.

(1) The social condition approach is often taken in monographic studies that pay attention to individuality. (2) The approach of the theory of evolutionary stages deals with the social structures with theoretical foundations. (3) The general theoretical approach uses historical materials as examples only for theory-building. (4) The cultural approach emphasizes the effect of the past on present society.

This paper also underlines the importance and usefulness of the cultural approach. It can reconstruct social theories according to the social outlook of common people who live everyday lives and revise the role of tradition in modernization.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻 研究生

社会史の流行がとりざたされるようになってから 10 年以上の歳月が過ぎようとしている。また近年、歴史的社会学 (Historical Sociology) 等の名称をかかげた雑誌が、とくに英語圏で発刊されている⁽¹⁾。それらに共通しているのは、歴史家サイドが、社会学ないし社会科学一般のもつ理論性や一般化に興味をもち、歴史学の可能性を拡げてゆこうとしていることである。ブローデル等の主張するような、歴史学を歴史的社会科学として再興しようとする姿勢がそれである⁽²⁾。このような問題関心につきうごかされた歴史学の諸研究の業績は豊かなものであり、一定の影響力をもつものに成長を遂げているように思われる。

これに対し、社会学のサイドでは歴史的な資料活用の可能性をめぐっての研究は残念ながら大きな潮流をなしているとはいいがたい。しかしながら、その研究がまったく途絶えているといえるものでもないし、近年、歴史学サイドの社会史の活動に触発されて、新しいアプローチを模索する研究も進んでいると考える⁽³⁾。本稿では、そのような歴史社会学的研究を参照しながら、社会学に歴史的な観点を導入することによるメリットについて考えてみたい。

そのさい、歴史社会学的な研究を、研究対象の拡がりにしたがって、社会条件論的アプローチ、段階論的アプローチ、一般論的アプローチ、文化論的アプローチに区分する。さらに、この四つのアプローチのうち、歴史社会学の可能性をめぐる重点が、段階論的アプローチと文化論的アプローチの対比にあると主張し、そのうちでも文化論的アプローチのもつ二つの利点を強調してみたい。それは一つには、生活主体の側から、社会の歴史を再構成する可能性をもっていることであり、またもう一つには、かつて「近代化論の再考」が議論されたさいに問題となった伝統と近代の問題にたいし、文化論的アプローチが一つの解決を与えてゆく可能性をもっていることである。

I 比較研究の手法による社会学と歴史学の境界設定

歴史社会的な研究の可能性を考えるにあたり、まず社会学と歴史学がどのように対比されてきたのか考えてみたい。そうすることで、社会学に歴史的な手法を導入することの意義や可能性、ならびにその限界が明らかになってくると考えられるからである。

社会学と歴史学が学問としてもっている本来的な性向のちがいについてはM・ヴェーバーの定式がもっとも有名であろう。彼は、最後の概念定義録となった『社会学の基礎概念』のなかでは、歴史学と社会学を「社会学は類型概念を構成し、出来事の一般的規則を探究する、それは、個々の、文化的に重要な行為、形象、人格の因果的な分析および帰属を求める歴史学とは反対である」と峻別している⁽⁴⁾。この定義付けがもっとも有名なため、ヴェーバーは一般性志向＝社会学、個別性志向＝歴史学と二つの学問を峻別したように考えられることもあるが、彼の全作品のなかでは、歴史学と社会学を併せて文化科学として一括し、自然科学と対比する場合が多く、「理解社会学の若干のカテゴリーについて」まで、その対比で論がすすめられていたことは、J・コッカなどの説くところである⁽⁵⁾。

社会学は、本質的に一般的な規則を発見しようとするものであり、歴史学は個別なケースを叙述するものであるという対比は、全く間違っているわけではないが、あくまでも二つの学問の志向の両極端を理念的に提示したものであり、現実の研究は、その間に無数のヴァリエーションをもって存在するといえよう⁽⁶⁾。そのうえ今日のように、歴史学が個別なケースについて因果的に説明することに積極的になった場合には、より両者の対比は曖昧になる。なぜならあるケースについて因果関係を確定するためには、別のケースとの比較が必要不可欠であり、複数のケース間に共通する法則的な認識も前提とされるからである。したがって、一般化＝社会学、個別的＝歴史学という認識は、両極端を示す場合に全くまちがってはいな

いにしても、歴史社会的な研究の実践について多くはかたりえないと考える。

さきほどから述べているように、今日の歴史学は、個別なケースを、ある事実があったとして叙述するだけでは飽き足らず、なぜに、その事実がそのようにあって、他のようにはならなかったのか説明することに意欲的になってきている。それが歴史的な社会学という領域が話題になる原因であるともいえよう。このような歴史家サイドでの態度の転換に大きな影響を与えたのが、アナル派の第一世代であり、彼らに影響を与えたのが社会学者の E・デュルケームであることは、宮島喬等の人々によって再三指摘されてきたことである。⁽⁷⁾ 宮島によれば、デュルケームは歴史学は説明を行うことによってしか科学となりえないと、歴史学における説明の意義を強調していたのであり、また歴史学が説明を行うためには、比較が必要であると、比較研究の必要を説いていたのである。

再三述べているように、今日まさに、デュルケームが要求したように、因果的な説明に積極的なものだから、歴史学が比較研究によって因果的確定を行うことをむしろ当然のこととして受けとめる必要がある。また比較研究の重要なのは歴史社会学においても同じである。歴史のもつ個別性と社会学のもつ理論性とを媒介するのが比較であり、歴史社会学に比較研究が不可欠のものであることは、多くの論者の認めるところである。⁽⁸⁾ したがって、説明を行うための比較研究の手法を検討してゆかなければ、両者の対比を鮮明にすることはできないといえよう。

そこでまず歴史学における比較の方法がどのようなものか考えてみたい。歴史学における比較研究について言及した古典的な定式としては M・ブロックのものがある。⁽⁹⁾ 彼は、まず比較についてのごく一般的な定義をすることから出発している。それは複数の類似点と相違点をもった現象を選びだし、その類似点ならびに、相違点の生じた原因を究明するというものである。これ自体、全く平凡な説明であるが、問題になるのは、その現象

を選びだし、比較をする範囲である。彼は A・メイエの『史的言語学における比較の方法』に準拠しつつ、歴史学のなかでの比較方法の範囲を大きく二つに分類している。⁽¹⁰⁾

A のタイプは、「ある現象において類似性がみられるが、その現象を生み出した諸社会が時間的にも空間的にも著しく隔たっているため、明らかに相互の影響関係によってもあるいはいかなる意味の起源の共通性によっても、その類似性が説明されえないような諸社会が対象として選ばれる場合である」。このタイプとして具体的にはフレーザーの民族学などが想定されている。このタイプの比較の利点としては「アナロジーを基礎とした仮説によって、資料の一定の欠落を埋める可能性、比較によって示唆されて、新しい研究方向を開くこと、特に、それまで説明不可能であった多くの残存現象の説明」が挙げられている。これに対し B のタイプでは、「隣接していると同時に同時代のものであり、相互に絶えず影響を与えあっており、発展の過程において、まさにその近接性と同時性故に、同一の大きな原因の作用に支配されており、少なくとも部分的には共通の起源に遡りうる諸社会を並行的に研究する」適用の仕方がなされるのである。

メイエは B タイプ以外の方法はないと断言しているし、ブロックも B のタイプのほうが、学問的に実り豊かであると指摘している、なぜなら、一つには厳密に分類することや、近似している点について批判的でありうるので、仮説性が非常に薄いからであり、また、そのことにより、より正確で、また事実にもとづく結論に達することが期待されうるからである。ここでは比較の対象をどのような拡がりをもって選択するのかが問題にされているのであり、歴史家であるブロックが、時間的にも、空間的にも隣接していて、しかも相互に影響関係の認められる範囲での比較を主張していることに注目したい。歴史的な説明は、あくまでも個別なケースの個性が問題になり、それがどのように他と異なり、またなぜそのように異なったのかを説明するのだから、あまり時間的に異なった事例や、地域的

に異なった事例を参照しても、何の参考にもなりえないのである。この点
が、個別なケースを認識根拠として用い、ケースの個性を超えて、一般的
な規則、理論を打ち立てる場合も考えられる社会学との最大の相違点であ
ろう。⁽¹¹⁾

もちろん社会学のなかでも、個別なケースの個性を重視し、モノグラフ
を研究の主軸にすえた研究があるのだから、この区分すら決定的なもの
はありえない。ただ一般に、歴史学ではとうてい考えられないような広い
範囲での比較を駆使した研究が、構想された理論なりテーゼの内容的な豊
かさによって容認される可能性が、社会学の場合のほうが相当程度に広い
ということは可能であろう。また単に比較の範囲の広狭だけでなく、そこ
から一般的な命題を引き出す方法もことなり、社会学においては様々なア
プローチが考えられる。そこで次に社会学での比較研究のヴァリエーショ
ンについて検討してみたい。

II 歴史社会的な研究の四象限

歴史社会学でのマクロな範囲での比較研究の可能性については、アメリ
カのスコッチボルとサマーズが興味深い分類をおこなっている。⁽¹²⁾

まず彼女達は論文の序文で、比較研究について言及した最近の文献が、
比較を一つ的方法的論理に還元していると批判し、少なくとも三つの論理
が、比較法を適用するについては働いていると主張している。それは理論
の並行論証型；comparative history as the parallel demonstration of
theory, 文脈対比型；comparative history as the contrast of contexts,
マクロ因果分析型；comparative history as macro-causal analysis の三
つである。理論の並行論証型では、予め構想された仮説や理論が有益であ
ることを示すために、ケースの並置を行われ、ケースは非常に広い分野か
ら選択される。比較の目的はケース間での類似性を主張することであり、
所与の仮説や理論がどの場面にも妥当することを訴えようとするものであ

る。この方法の限界は、歴史的なケースの説明よりも、理論的モデルや仮説を推敲し、詳述することが先立つことであり、ケースごとの差異は、文脈の特殊性によるものとして退けられてしまうことにある。スコッチポルはアイゼンシュタットをこのタイプの代表と考えている。

文脈対比型は並置法のちょうど反対のものであり、個々の特殊なケースのユニークな姿を問題にし、その特殊性が想定しうる一般的社会的プロセスにいかなる影響をあたえるかを示す。この場合、対比は個々のケース間で行われる。対比をするための準拠枠として、理念型のような広い範囲の図式や問題設定、装置が用いられることもある。理念型を用いることによって、個々のケースの特殊性をうきあがらすことができるからである。またこのタイプの研究では、個々のケースの全体としての歴史的な統合が注意深く尊重され、個別の国家、帝国、文明、宗教などが、それ以上細分化できない、それ独自の権利をもった全体、複合体、社会・歴史的形態を構成していることが示唆される。これも、この方法の一つの眼目である。この比較によって、一般化された理論に歴史的な限定を加えることができるのだが、また逆にいえば、この比較法をつうじてあらたな一般化が獲得されないことに限界がある。ベンディクス、ギャーツなどの研究がこのタイプの比較法によってなされている。

マクロ因果分析を、著者達は、多数の量的なデータが得られた場合に、因果的な推定を可能にするため、一連のケースを操作し、変数をコントロールしてゆく点において統計分析の方法と似ていると考えている。この比較の主眼点は、幾つもの変数が考えられるマクロな社会現象のなかで、表面的にみられる一致や、差異のなかから決定的な変数を見つけだすことにある。パーリントン・ムーアがこのタイプの代表とされている。

社会学者による、歴史社会学的な研究は、一般に、スコッチポル等のいう並行論証型にながれやすいものである。しかしそれが限定的な意味しか持たないことは常に意識されていなければならない。このタイプの比較が

なされたとしても、あらかじめ設定された理論なり、モデルに対して新しい知識が付加されることはない。なぜなら事例はモデルに適合するものが選択され、その類似性が強調されるからである。ケース間での相違点に着目した時のみ、予め設定されたモデルや理論に新たな知識が付加されるのである。この手法を誤ってもちいると、例証列挙主義とでも呼ぶべきような、モデルに当てはまる事例を幾つも列挙することにむかひがちである。しかし予め設定されたモデルに修正を加えさせるような相違点に着目しないかぎり、事例は一つ挙げられていれば充分であり、それ以上は、読者の理解のたすけることになるか、著者の博識を披瀝する以上の意味はもたないのである。

二つめの文脈対比型は、個性を重視し、個別なケースを総体として描こうとする点で、社会学でいえば、モノグラフに、また歴史学的な研究に近いといえよう。しかしながら、理念型的概念を用いることで、それとの偏差から、個別なケースの独自性を強調しようとする点は、ヴェーバーの方法の影響を物語るものである。

以上の二つの方法の対比が明確なのに対し、三つ目のマクロ因果分析は、いくつか想定される条件のなかから、問題にしている社会の形成にとって、何が決定的な役割をはたしたのかという因果関係を確定するための方法として類型化されている。著者たちはこの三つの方法を三角形のなかに組み込み、その中間の段階を考えたり、またどの方法もそれだけで完結するものではなく、別の方法の助けを必要とすると考えている。しかし前の二つの手法とマクロ因果分析とがどのような論理的な位置にあるのか明確ではなく、恣意的に三つの類型を提出したような印象は拭いえないものである。これがスコッチポル等の分類の難点であろう。

このようなマクロなレベルでの比較研究については、日本人の研究者では鳥越皓之が三つのアプローチを分類している⁽¹³⁾。それは、①文化論的アプローチ、②一般論的アプローチ、③社会条件論的アプローチの三つであ

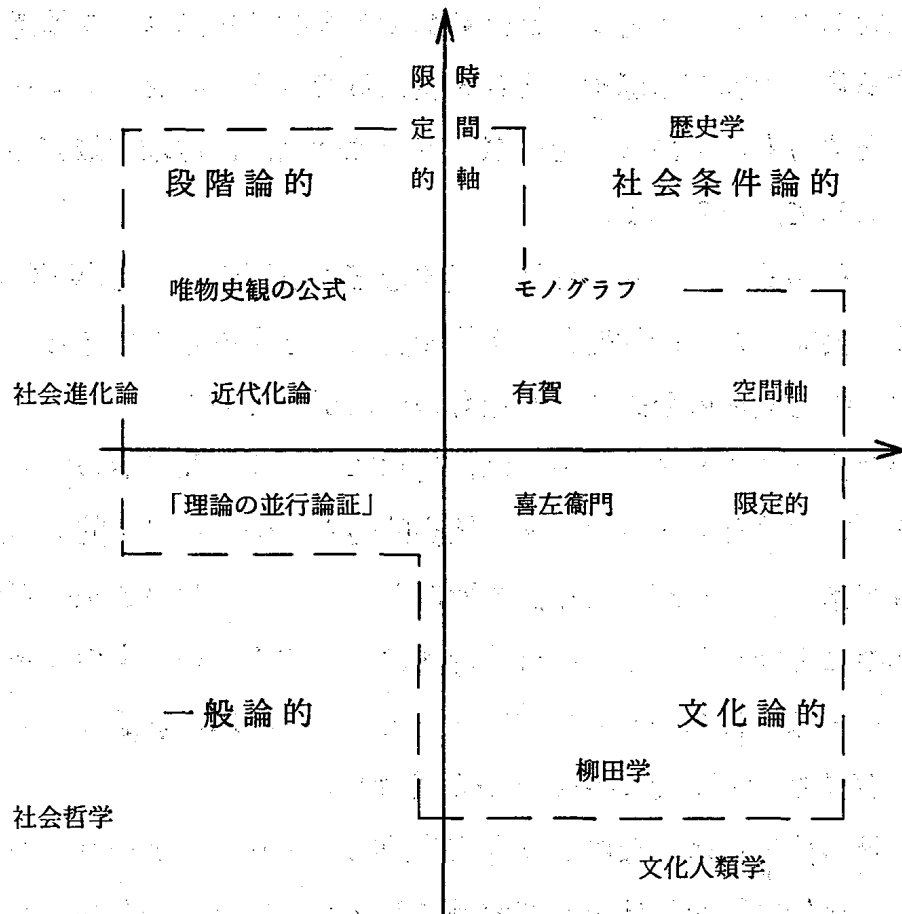
る。文化論的アプローチとは、社会変動や社会的変化には余り顧慮せず、対象とする現象の構成原理や、それを支える価値や規範をストレートに究明しようとするものである。その際、資料は時代的、地域的厳密性のある程度犠牲にして用いられる。

第二の一般論的アプローチは個別民族などの個別性を一応視野から外し、人類社会共通の一般的变化や性格を見ようとするものである。具体例としては、唯物史観の公式のようなものがあがっている。

最後の社会条件論的アプローチは、鳥越によれば、前二者の中間に位置する。その基本的な考え方は、ある社会的特性（例えば日本的経営）は社会的所産であり、したがって社会的所産を支えている社会的条件が変われば、当然のことながら、その社会的特性は瓦解するというものである。このアプローチは社会的条件の変化に関心を注ぐために、短期の（長くて40～50年）歴史的分析となる場合が少なくない。

この鳥越の分類では、なによりも文化論的アプローチという、ある地域や民族の文化的特性を総体として問題にしようという立場を命名し、その存在を、明瞭にした功績は大きいといえよう。なぜなら、今日、流行している社会史の多くは、この民族の文化的特性の役割を何らかの仕方で強調するものだからである。しかしながら、鳥越においても、三つのアプローチはいかなる関連をもっているのか、曖昧なままであるきらいがある。とくに文化的な規定に重きをおき、時間的な規定に重きをおかない文化論的アプローチと、時間的な規定（この場合それは発展段階としてあらわれる）に重きをおき、地域的民族的特性を考慮しない一般論的アプローチの中間に、それぞれの場合の社会的な条件を考慮し、モノグラフに最も近い、社会条件論的アプローチがくることは、三つのアプローチを直線上にならべたかぎり、簡単に理解できないものである。そこで、スコッチポルや鳥越の三つのアプローチを、比較の範囲ないし資料活用の時間的限定性と空間的限定性の二軸を交差させた四象限のなかに整理し置き直してみる

歴史社会学における文化論的アプローチと段階論的アプローチ

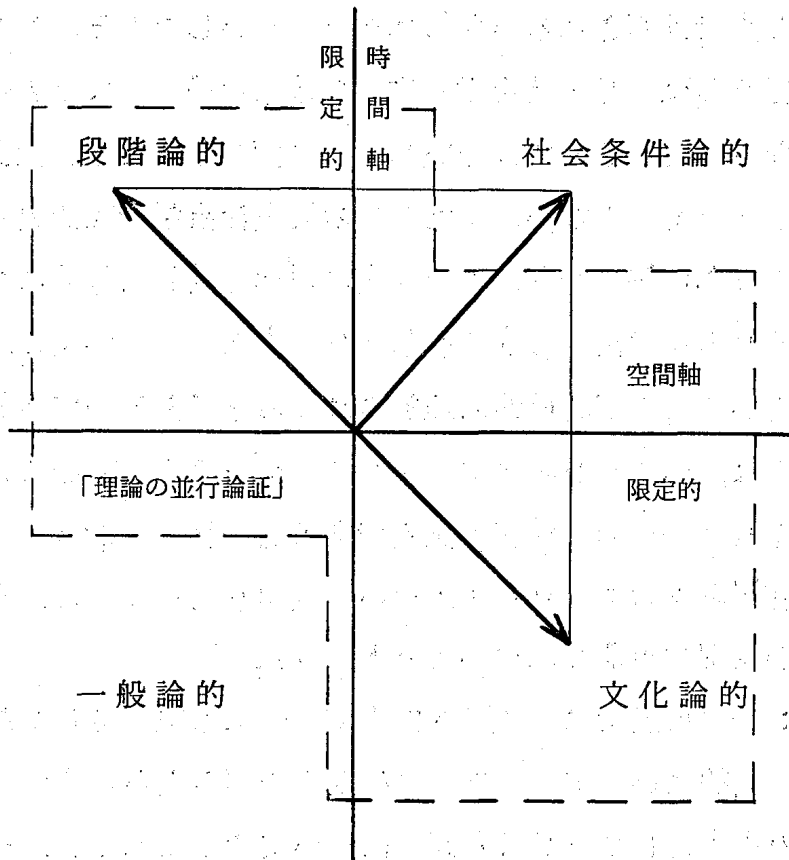


上の図は、歴史社会学の研究を行うさい、資料の選択や比較の範囲をどのように拡げるのかを主題にして構想したものである。横軸は空間の軸で、右に向かうほど空間的に限定された範囲で、資料が参照されることになる。縦軸は時間軸で、上に向かうほど、時間的に限定された範囲で資料が検討される。縦軸と横軸を交差させることで四つの象限がえられる。破線内は歴史社会学が対象とする範囲を意味する。

図 1 歴史社会学の四象限

(図 1).

この四象限では、右に向かうほど比較の範囲が空間的に限定され、上に向かうほど時間的に限定される。その際、鳥越のいう一般論的アプローチは内容的には発展段階論と限定できるものなので、ここでは第二象限におくことが許されるだろう。また第三象限には、スコッチポルのいう、理論の並行論証型のような、空間的にも時間的にも限定を加えず、理論が先行するタイプを置いた。鳥越のいう三つのアプローチで歴史社会学としての



第二象限から第四象限にかけての斜線は、段階論的アプローチと文化論的アプローチの対比を示している。右上向きに、上がってゆけば、それだけ空間的、時間的限定性を増した研究になる。

図 2 歴史社会学の主要な対象の三角形

本来的な研究は覆い尽くされていると考えられるが、敢えて第三象限において、縦軸と横軸の中におくことで、三つのアプローチのそれぞれに対して持つ特徴が理解しやすくなると考えたからである。例えば三つのアプローチの位置関係も文化論的アプローチと段階論的アプローチの対比を底辺にし、社会条件論的アプローチに向かうベクトルを高さにした三角形を考えてみると、社会条件論的アプローチが中間にあるように思える意味も理解できよう (図 2)。

このような整理は、あまりに広い範囲にわたるものであることや、空間と時間という軸が一般的過ぎること、またその二軸を交差させることの可

否など多くの点で批判されるかもしれない。しかしながら、ここでこのような整理を行うのは、歴史社会学の唯一の体系を築こうなどという高慢な意図のもとなされているのではないし、この図のなかで歴史社会学のすべてが表現されるとも考えない。ただ今日の歴史社会学や社会史の直面している問題群のうちの幾つかを、この図式に対比を通して鮮明にすることができ、またそれらを解決してゆく有効な解決方法の一つが文化論的アプローチであるということが説得的に理解されうると考えるのである。したがってこの図式は、いくつかのアプローチの特徴を際立たせることを主眼にして構成された一つの図式化の試みであると言っておきたい。

そこで、まず各々のアプローチについて説明を加えながら、今日の歴史社会学の問題状況や可能性について考えてみたい。

第一象限：この象限では、時間的にも空間的にも限定されたなかで研究が行われる。端的に言ってモノグラフ的なものが考えられるだろう。このアプローチの代表として有賀喜左衛門について考えてみたい。有賀については、後に文化論的アプローチのところでも言及するつもりであり、彼の研究領域が、モノグラフ的な研究におおいつくせるものでないことは自明である。しかしながら、彼の研究の土台をなすものにモノグラフがあったことは、彼の主著である『日本家族制度と小作制度』が、二戸郡石神の大家齊藤家のモノグラフである『大家族制度と名子制度』をもとにしていることが示している⁽¹⁴⁾。有賀にかぎらず、当時の日本の社会学には、モノグラフを出発点にするものが少なくなったことは喜多野精一、及川宏等の研究からも見て取れる⁽¹⁵⁾。

これは文化論の問題とも関わることであるが、有賀は民族比較について言及しつつ次のようにいっている。「私にとって確実なことは一般性と特殊性とは相互媒介するという事実である。……(中略)……一般性は特殊性を通して、特殊性は一般性を通して追求しなければならないということは、科学研究における基礎理論として考えられるのであって、一般性のみ

が最初に達し得られるのでもなければ、特殊性のみが先に至り得られるのでもないが、今日の研究の実際からみて、後者がはなはだしく欠けていることに気付かなければならない⁽¹⁶⁾。これは民族比較について述べて文脈で書かれているので、そのままモノグラフについての考えを示した部分であるということとはできない。しかしこの一般性と特殊性についての考え方は、彼のモノグラフと社会学理論についての考え方にも通底するものであろう。この考えによれば、モノグラフは理論性を排除したところに生まれるのではなく、理論性との関連に生まれるのである。ある事実を意義あるものとして取上げること自体に、対象に対する理論的な認識を必要とするし、また対象の全体をある統一体として描き構成するためには、対象に対する理論的認識は不可欠のものといえる。したがってモノグラフ研究が十全になされるためには、十分な対象に対する理論的認識が必要であり、理論的認識はモノグラフを通して表現されるのである。

有賀の社会学の方法論を自分の研究のなかにもっとも意欲的に取り込んでいる中野卓も自らの研究を歴史社会学であると考えている。彼は、今日生活史の研究を押し進めているが、それも有賀のいう個別と一般との相互関係を、個人と全体社会との相互関係とよみかえることで出発したものであり、個人をとおして社会を再構成する研究をすすめている。この研究も対象とする時代や社会についての認識なしになしえるものではないだろう⁽¹⁷⁾。以上のように、時間的空間的に限定されたなかで資料を選択し、研究をおこなっていくとしても、そこには逆に一般的認識が必要であることを確認して、第二象限にすすんでみたい。

第二象限：ここに位置する研究では、時間的な規定が注目され、地域的な個性にはあまり関心を払われぬ。時間的な規定といっても、西暦何年というようなことではもちろんなく、発展段階を理論的に設定し、対象とする社会がどの段階にあるのか判定しようとするものであり、また同じ段階にある社会は、どこであれ同じ特徴をもっていることになる。その段階

は概念的なものであるから、理論的な視点が強くでる。

鳥越はマルクスの唯物史観の公式を例にあげているが、たしかに硬直化したマルクス主義はこの傾向を強くもち、大きくは資本主義段階と社会主義段階、さらには帝国主義や国家独占資本主義のような、段階的な規定をつくり、その段階ごとの矛盾と解決によって歴史的過程を説明しようとする。

ただしマルクスの規定のなかでも、資本主義的生産に先行する諸形態としての、アジア的、古典古代的、ゲルマン的の各形態のように、概念化されて地域的な規定とも、段階的な規定とも断言できないものもある。⁽¹⁹⁾ ただし川島武宣がゲルマン的共同体について解説しているように、概念としてのゲルマン的なものは、ヨーロッパであろうと、日本であろうと、世界中どこにでも存在しうるものである。⁽²⁰⁾ この点で、空間的な規定をまず第一に考える文化論的アプローチとは、基本的に線を描うことができる。同様のことはヴェーバーの比較史の方法にもあてはまる。ヴェーバーを「類型論的に比較する普遍史」の代表者と考えた場合には、段階的な発展よりも、複数の発展経過をたどる、社会変動の諸パターンを彼は導きだそうとしたのだと考えることが出来る。⁽²¹⁾ このような方法は今日ではベンディックスによって進められていて、理念型を用いて、ある社会の特性を描こうとする限り、段階的な要素は極小的になるだろう。これら研究は、図のなかでは第三象限のうち、もっとも原点に近いところに位置することになる。

このほかに古典的な社会学者達が伝統と近代とで幾つもの対立する概念設定を行ったのも、一応ここに分類して考えてみたい。ただし近代化論という名称で一般化されるなかには、伝統と近代の段階設定よりも、スメルサーのように社会的な分化の一般理論に強く関心をもつものがあるので、それについては第3象限で考えたい。近代化論は60年代の後半からその修正が議論されはじめ、単に伝統的なものと、近代的なものの性格を対比するだけでなく、伝統社会の多様性、発展経路の複数性をその視野に置く

ようになったのは周知のことがらである。⁽²²⁾これは段階論的アプローチに、
いかに文化論的アプローチの成果を組み込むかという問題であったといえ
よう。また一方で、歴史性からはなれた、純然たる進化の形式論理を打ち
立てようとする研究が、ヴェーバーの合理化論などをふまえながら、J・
ハーバーマス等によってなされたが、これらが歴史社会学的な研究と結び
ついてゆけるものなのかどうか、今後注目してみたい。⁽²³⁾

第三象限：この象限は、鳥越の区分にはなかったものであるが、空間と
時間の二軸を交差させて、アプローチ間の関係の理解を進めるために、敢
えて設定したものである。位置づけとしては一般理論がまずあって、それ
を例証するために、事例が時間的にも空間的にも限定されない広い範囲か
ら、恣意的に列挙される場合である。スコッチポルのいう「並行論証型」
がこれにあたる。例えば、スメルサーは彼の歴史社会学的な研究の代表作
である『産業革命における社会変動』⁽²⁴⁾の方法意識を説明した論文のなかで
つぎのように言っている。「私の研究が多くの歴史家の仕事からきわだっ
て区別されることは、社会学思想の一般的伝統から導かれた明示的形式的
な概念的モデルの事例的説明として、産業革命にアプローチした点であ
る。……私に問題を抱かせたのは、産業革命の時代そのものではなく、こ
の抽象的、分析的モデルなのである。他の国の他の時代の工業の変動を選
んでもよかったし、または工業化が重要な位置を占めていないような急激
な社会変動の例をさえ選んでもよかったのである」⁽²⁵⁾。社会変動は、社会的な
分化をともなうとிரった、機能主義的、一般的テーゼを実証するためにこ
の研究はなされているというのである。ただしスメルサーの場合には、理
論と事例との関係はある程度偶然的だったとしても、事例は限定された範
囲から挙げられているといえよう。ところが、もしある理論を証明するた
め、事例が無限定に列挙されたなら、よい結果を生むことは少ない。

第四象限：この象限では、地域を特定し、その地域で過去から現在に通
底していると考えられる文化的な特性が、その社会の現在に与えている影

響を特に重視して考える。

まずこのアプローチの歴史社会学としての危険性をさきに挙げてみたい。一つには、例えば日本なら日本の文化的特性といっても、それ自体、歴史的なものであり、変化するものであるということが挙げられる。この変化を忠実に辿ろうとするなら、文化論的な方法は、社会条件論的アプローチにかさなって独自の意義を持たなくなる。したがって文化論的アプローチと名乗る場合には、そのような追跡を中断し、日本文化の特性として、自分は何を考えるのか、予め明示しなければならない。ただしこの時提示された文化の性格は一面的な抽象の結果であることが忘れられてはなるまい。

また、もし確たる日本の特徴をつかまえようとするならば、プロードルのいう長期波動のような簡単には変化せず、長い時間をへてようやく変化するような特徴をつかみださねばならない。そのような手法を極端にすすめれば、時間は意味を持たなくなって、文化人類学に吸収されてしまうことになる。もちろん文化人類学自体に意義があるのだから、それでもかまわないといえなくもないが、歴史社会学としては、あくまでも時間的な問題を視野に入れておくべきであろう。したがってある地域の文化的な規定が歴史的な諸段階にそれぞれの様相をもって表れてくることを理解すべきである。

文化論的アプローチの代表者としてまず柳田國男をあげることができよう。「思ふに古今は直立する一つの棒では無くて、山地に向けて之を横に寝かしたやうなのが我国のさまである」と考えた柳田は、民族総体としての常民の歴史を捉えようとしていた。⁽²⁶⁾この柳田の方法意識を社会変動論に導入し、新たなパラダイムを構想しようとしたのが鶴見和子である。彼女は「われわれのうちなる原始人」という表現でもって柳田の方法を特徴付けた。「現在の日本人 および日本社会の内部には、原始も、古代も、中世も、すべてが入れ子細工のようにあるからこそ、日本人は日本の原始時代

のことも古代人の思想も理解することができるのだという確信が柳田にある。」と鶴見は指摘している。したがって現代の日本人の内面や民俗を探究してゆくことで、日本の歴史を理解していくことができることになる。⁽²⁷⁾
 このような内面を掘り下げていくような研究は、どこの社会でもできるものでなく、柳田は古代のものまで多く残っている日本でだけ、それが可能であると考えていた。しかし鶴見は、その考えを自民族中心主義的偏見であると批判している。明治の人々が、西ヨーロッパと日本を対比した場合には、現代の生活のなかに古いものは、日本のほうが多くのこっているといえただろう。しかし、その優位は絶対的なものではなく、例えばインドなどではより一層多くのものが残っているだろうというのが鶴見の立場である。我々はここで、歴史社会学の多様なアプローチについて考えたいのであるから、文化論的なアプローチを日本においてのみ可能でとは考えたくない。また実際、どのような社会でも多かれ少なかれ伝統に拘束されているものである。ただ、伝統による拘束によって多くのことが説明可能なのか、それともかなり限定された範囲内では、伝統から現代を説明しえない社会なのかの違いがあるだけである。

以上のように柳田は文化論的なアプローチを代表するに相応しい面をもっているのだが、また文化（人類）学に吸収されてしまう危険性ももっていた。この点を中井信彦は巧みに指摘している。彼が論ずるところによれば、⁽²⁸⁾一回性のない民衆の日常性の歴史を主張していた柳田は、歴史学者にそれが受け入れられないと文化論的な面を強くしてゆく。かって「無数のへの字」で描かれた民衆や、「道々のもの」・「力者」たちのはたらきをとりあげていたのが、皇室や華族をふくめた「日本人ならば共有しあっている、単一の文化的伝統ともいべきもの」へ、関心をずらしていったというのである。中井は、日本人の民族性について語る晩年の柳田を「かって日本人の国民性を問われたとき、そんなものが分るか、強いてあげれば事大主義と適応のすばしこさくらいなものだといつてのけた、かっての柳田

との距離は遠い。」と評したうえで、これは柳田に対する評価と継承の仕方の問題だけでなく、アナル派の歩みと現状にも大きく横たわっている問題であると続けている。

文化論的アプローチを先の図式で、縦軸の下方方向に進めていくと、歴史性は捨象され、上で述べたような危険性が高まってゆく。これに対し、縦軸の上方方向に上ってゆけば、それだけ、その時々⁽³⁰⁾の社会的条件に注意を払うことになり、文化的な規定性がそれぞれの段階の中で、どのように表れてくるのか観察することが可能になる。ただし対象とする文化の個性は何なのか、それだけ弱くしか記述できなくなる。

このアプローチの一つの成功例に有賀喜左衛門による小作慣行の研究が挙げられる。有賀の研究の基礎にモノグラフがあることは、第一象限のところ⁽³⁰⁾でみたのだが、それをふまえつつ有賀は、日本の小作慣行について、講座派のように段階論的アプローチをする人々と異なった分析を行うことができた。『日本家族制度と小作制度』の冒頭で、有賀は当時の経済史の研究が半封建的、前資本主義的等々の形態面についての論争や、分類に終止したことを批判し、「小作慣行の本質を問題にする場合に……現在の支配的な小作形態のみを論ずることによって、それが解明されるものとは思っていない」と批判している。このような彼の観点が、最も鮮明に打ち出されているのは小作の年季に関する分析である。小作の年季の問題は、小作の土地に対する権利に深く関わる問題であり、ひいては農村の改良という実践的な問題に関係するものであった。

その年季に対する観念は大家族経営や同族団内部の親方子方の関係の中では無年季であったのが、その範囲を越えて小作関係が拡がり、複雑化するなかで土地に対する占有の意識や、他の貸借関係に対する意識と結びつくことで変質を遂げていったと説明している。そして、これらの意識は、武家時代においては日本の封建的性格によって、また明治以降は資本主義社会の特質によって規定されていたと説いている。これは段階論的な観方

であるが、そこに終わることなく、「それにもかかわらず、年季意識は欧米社会に比べれば鋭くないしその性格も異なっている。日本における封建的年季意識も資本主義的年季意識も、その底流をなす無年季的傾向に色づけられていることを、小作慣行においてみることができると私は思う」と⁽³¹⁾続けている。つまり小作関係や年季に対する意識は段階的に規定されながら変遷を遂げてゆくが、その底部に長く続いた無年季時代の意識があって、それが今日も小作関係や年季に対する意識に対し影響をあたえていると考えているのである。日本の家族制度とそれを形造ってきた日本人の心意を日本の文化の基底におき、小作制度など、様々な社会関係が発展的にどのように生じるかをおさえ、同じ時代に複数の段階のものが並立しえることを説いた有賀の方法は、複雑であり、ここでいう社会条件論的アプローチも段階論的視点も含めていると考えられる。だがその最も大きな強みは日本の「民俗的な性格」についての深い洞察を行論の土台にすえたことであろう。

Ⅲ 文化論的アプローチの可能性

さて前節で、四つのアプローチについて説明したが、なかでも第二象限の段階論的アプローチと第四象限の文化論的アプローチを対比させて考えてみることで、現代の歴史社会学をとりまくいくつかの問題点があきらかになる。⁽³²⁾段階論的アプローチでは社会構造が問題にされた。経済的な関係、法律的な関係を基礎にしつつ、どのような支配関係があり、その社会がいかなる構成原理をもっているのか、理論的に解明し、その社会での構成原理の変動を発展史的に後付けるのが、ここでの主眼である。それに対し文化論的アプローチでは、定義上では、そのような社会構造の変動にも関わらず、底在する文化的特徴に関心をはらうものである。もちろんこれも理念型的な区分であり、実際の研究では、有賀の場合などに典型的に見られるように、社会構造の転換に対応して文化的特性がどのように表れる

のか検討してゆくことが必要になる。またもしそうしなければ、文化人類学に吸収されてしまうだろう。また段階論的アプローチに文化的特徴のバイアスを加えなくてはならないことは、発展途上国の近代化の問題などで認識されたことである。⁽³³⁾ そのうえ単に、構造を概念的に構成し、順序だてるだけでなく、変動の具体的なプロセスを後付けようとするなら、次に指摘するような文化論的アプローチの多くの例にみられるように変動のプロセスを生きる生活者の視点を持ち込むのが有益である。

ところで、日本での社会史の研究史を見るかぎり、この二つのアプローチを比べたばあい、近年まで圧倒的に段階論的アプローチが優勢であったといえよう。このことはすでに大正13年の喜田貞吉と本庄栄治郎との論争に見られるものである。この論争は、喜田が当時主催した雑誌『社会史研究』に狐憑きについての資料が掲載されていたことに対し、社会階級上の経済問題、富の分配が社会史の問題であり、狐憑きまで社会史に入れるのは言葉の濫用であると、本庄が批判したのが発端であった。⁽³⁴⁾ また講座派と労農派による資本主義論争のさなか、有賀喜左衛門の「名子の賦役」が、注目されることのなかったことも文化論アプローチに対し、段階論的アプローチが優位であったことを示していよう。そのうえマルクスやヴェーバーの文献的研究が非常に発達したこともあって、文化論的アプローチは社会科学ではないかのような評価をうけてきたともいえる。

このように文化論的アプローチは、どちらかという低い評価を受けてきたのであるが、今日急速に関心を集めつつある分野でもある。70年代からの柳田國男の研究熱は益々盛んであると言えるし、また民俗学の研究成果をふまえた研究も増えている。さらに段階論的アプローチの代表者といえる丸山真男が、近年「執拗低音」という言葉を用い、文化論的次元に注意をむけているのも象徴的である。⁽³⁵⁾ このように文化論的アプローチが注目を集めはじめたのは、それだけの意義があるからと考えられるので、最後に段階論的アプローチと比較したばあいの文化論的アプローチの利点につ

いて若干述べてみたい。

段階論的アプローチと文化論的アプローチとは、比較対象の時空間的な拡がりから設定したものであるが、現実の研究のなかでは、この条件のほかに幾つかの対応をもっている。例えば文化論的アプローチをする人には、文化を担い手として、庶民を考え、その生活様式の変化を主題にする人が多い。柳田の常民の研究や、有賀の庶民生活における創造性といった視点はその典型であろう。このようにおさえると、段階論と文化論の対比は、社会のなかに生活する人々が、社会的な諸条件に規定されていることに重点をおくか、その規定にたいし、いかなる意識をもって創造的な面を発揮して生きているかに重点をおくのかの対比に読みかえうる部分もあることがわかる。

このような対比を日本思想史の安丸良夫の文献にみる事が出来る。彼のような民衆史の立場の人は、日本史の分野の人でも、ヴェーバーなどの社会学の文献をよんで、社会史的な関心をつよく持っていることが多い。安丸には二宮尊徳や大原幽学の思想を分析しながら、庶民の通俗道徳から、いかに実践的な生活倫理が形成されうるか論じた論文がある。そのなかで、幽学が博打、不義密通、女郎買い、大酒などを強く戒めた部分を引用しながら、「そうした生活態度は、たしかに当時の民衆にとって破滅的なものだったと思われる。「家」と個人の破滅は大局的にみれば客観的な歴史法則によるものであるが、しかし一つ一つのばあいをとってみれば、当事者のほんのちょっとした油断や失敗が契機とならざるをえない。資本主義の形成過程——農民層分解の過程を、その渦中におかれた人々の主体性の問題としてとらえたとき、右にのべたような生活態度の問題としてみえてくるのである」と解説している⁽³⁶⁾。農民層分解という歴史的なプロセスを理論的に解明することを、社会史の第一の課題にするのか、そのプロセスを生きた人々が、そのプロセスに巻き込まれるなかで、何を考え、それに対しどのように振る舞ったかまでふくめて社会史の課題にするかの違い

である。社会構造にしろその構造転換にせよ、それは社会に生きる人々の総和以上のものであるというのが社会学の大前提の一つであり、その総和以上の社会構造は、社会をなす一人一人に拘泥していたのでは把握することはできないというのも、一つの正しい解釈である。だが社会的諸条件に規定された中で、普通の人々が自覚的に身につけた生活態度は次の段階での、変動を左右する有力な条件にもなりえることを安丸等の研究は教えてくれる。社会構造の解明を主眼にする段階論的アプローチでは、このような庶民の社会構造や変動にたいする働きかけを十分には捉えることはできないだろう。

もう一つの特長は、古典的な社会学以来、伝統と近代との一般的な対比のなかで取り上げられてきた伝統にたいし、様々な内容を与え、多様な発展の経路を導き出すことである。⁽³⁷⁾ とくに昨今の社会史を名乗った諸分野の研究では、一般に普遍的だと見なされてきた、ヨーロッパの近代が実はヨーロッパの伝統的な社会の意識や慣習を活力にして形成されたものであることを明らかにしてくれている。ヨーロッパにおける近代がその伝統を苗床にして育まれたものならば、非ヨーロッパ社会でのそれもそれぞれの伝統を苗床にしなければ十分によく育つことはできない。例えば前述の安丸の文献では、日本の普通の生活者が、伝統的な価値意識に拘束されたなかで身につけた生活態度が、日本の近代化の動力になりえたことが指摘されていた。社会変動を生活者の側から捉え直そうとするとき、伝統的な要素は、彼らの阻害要因であると同時に、殆ど唯一の資源であるとも考えることもできるのである。

このように文化論的アプローチは、社会学の研究に、いくつかの新しい視点を持ち込むことを可能にする。しかし文化論的アプローチだけを強調するならば安易な文化論に流れる危険性がある。文化論的アプローチが最近まで極端に軽視されてきたことを差し引いても、この事実には変わりはない。したがって望まれるは文化論的アプローチに、他のアプローチの成果

を取り込んだ研究である。つまり、有賀にみられたような、ある文化的特性が段階的な条件に規定されて、種々の形態をもってあらわれるのをとらえた研究。さらに長い時間のなかで、文化的な特性自体が変化してゆくプロセスを理論的に解明することが必要である。中井信彦のいう「ある繰り返しが別の繰り返しに変わる」仕組みを理論的、実証的解明することは今後とも、文化論的アプローチにたった歴史社会学の研究を行うものにとって最重要の課題であり続けるだろう。⁽³⁸⁾

註

- (1) 例えば Comparative Studies of Society and History (以下 CSSH と略記する。), Journal of Social History, Journal of Historical Sociology, Journal of Interdisciplinary History 等を挙げることができる。
- (2) Braudel, F., "Histoire et sociologie", Traité de sociologie. publié sous la direction de GURVITCH, I^{re} section, ch. IV, t. 1, Paris, 1958, pp. 33-98 邦訳「歴史学と社会学」, 『フェルナン・ブローデル』日本評論社, 1989年。
- (3) 日本での歴史社会学の研究動向については以下の文献を参照のこと。樺俊雄『歴史社会学の構想』青也書店, 1949年。樺俊雄博士古稀記念論文集編集委員会『歴史社会学その周辺』中央大学出版部, 1975年。中野卓「歴史社会学と現代社会」『未来』, 1975年2月号。正岡寛司『家族—その社会史的変遷と将来』学文社, 1981年。筒井清忠『昭和期日本の構造—その歴史社会学的考察』有斐閣, 1984。これについては書評論文がある。三宅正樹「社会学と歴史学との対話」『思想』731号。三浦耕吉郎「社会史理論の課題と社会学」『思想』745号。
ただし社会史の実証的な研究が社会学者によるよりも歴史家によってなされるのは日本だけのことでなく、イギリスの Calhoun は、最近のイギリスの歴史社会学を紹介した論文のなかで、アメリカに比べ、イギリスでは歴史社会学の研究者はみな自分を歴史家と考えていると述懐している。Calhoun, C., "History and Sociology in Britain: A Review Article" in CSSH vol. 29-3.
- (4) Weber, M., "Soziologische Grundbegriffe" in Wirtschaft und Gesellschaft, 5 Aufl., Tübingen, 1980.

- (5) Kocka, J. "Max Webers Bedeutung für die Geschichtswissenschaft" in Max Weber, der Historiker, hrsg. von Jürgen Kocka. Göttingen, 1986.
- (6) イギリスの歴史家ピータ・バークも「社会学は、人間社会の構造に関するジェネラリゼーションを強調する研究であり、歴史学は、個々の具体的人間諸社会の間の相違点と、時の経過のうちにそれぞれの社会の内部に起こる諸変化を強調する、個々の人間社会の研究として定義してよいであろう」と二つの科学を類別している。Burke, P., *Sociology and History*, London, 1980. 森岡敬一郎訳『社会学と歴史学』, 慶応通信, 1986年, 3頁.
- (7) 宮島 喬「フランス社会学派と集合意識論—歴史における「心性」の問題にふれて」『思想』663号.
- (8) 例えば、アメリカのV・E・ボネルは、その適用の仕方は様々だとしても、比較分析は歴史的・社会的試みに本質的な部分であると明言している。Bonnell, V. E., "The Uses of Theory, Concepts and Comparison in Historical Sociology" *CSSH* vol. 22-2. p. 160.
- (9) Bloch, M., "Pour une histoire comparée des sociétés Européennes" in *Revue de Synthèse Historique*, Déc. 1928, pp. 15-50. 高橋訳『比較史の方法』, 創文社, 1978.
- (10) Meillet, A., *La Méthode Comparative en Linguistique Historique*, Oslo, 1925. 泉訳『史的言語学における比較の方法』, みすず書房, 1977年.
- (11) 認識根拠と实在根拠の区別はヴェーバーのものによった。端的に言えば实在根拠とはその事実があったことに意味をもたせたものである。それに対し認識根拠とはある事実を通して一般的な認識に至るものである。例えば、未開部族などの国家形成をフィールドワークによって研究し、そこから国家の形成についての理論をたてた場合には、認識根拠として事実を用いているのである。ヴェーバーによれば歴史学は、対象の事実をただ認識根拠としてのみ研究するものではなく、かならず实在根拠としてとり扱わなくてはならない。vgl. Weber, M. "Kritische Studien auf dem Gebiet der kulturwissenschaftlichen Logik" in *Gesammelte Aufsätze zum Wissenschaftslehre*. 森岡訳『歴史は科学か』(みすず書房, 1969年)。またヴェーバーの实在根拠と認識根拠については稲上 毅『現代社会学と歴史意識』(木鐸社, 1973年)の第3章の記述が著しい。
- (12) Theda Skocpol and Margaret Somers, "The Uses of Comparative History in Macrosocial Inquiry" *CSSH* vol. 22-2.

- (13) 鳥越皓之『家と村の社会学』社会思想社, 1985年.
- (14) 有賀喜左衛門「大家族制度と名子制度」『有賀喜左衛門著作集』Ⅲ, 未来社, 1967年.
- (15) 当時の社会学と調査の関係については, 中野卓『商家同族団の研究』上(第2版, 未来社, 1978年)の5-43頁を参照.
- (16) 有賀喜左衛門「日本家族制度と小作制度」『有賀喜左衛門著作集』Ⅱ, 未来社, 1968年. 706頁. 有賀における類型設定については, 鳥越皓之「有賀理論における生活把握の方法」『トカラ列島社会の研究』(御茶の水書房, 1982年)を参照した.
- (17) 中野卓「歴史社会学と現代社会」『未来』, 1975年2月号, 未来社.
- (18) 中野卓「個人の社会的調査研究について」『社会学評論』, 125号.
- (19) Marx, K., "Formen, die der kapitalistischen Produktion vorhergehen" in Karl Marx Friedrich Engels Werke Band 42, 手島訳, 大月文庫, 1963年.
- (20) 川島武宣「「ゲルマン的共同体」における「形式的平等性」の原理について」川島武宣・松田智雄編『国民経済の諸類型』, 岩波書店, 1968年.
- (21) 「類型論的に比較する普遍史」という概念はシュルプターによる. 彼は今日社会学が社会の発展を問題にする場合は, ①19世紀以来継承されてきた客観主義的な歴史哲学, ②機能主義的に導かれた進化論, ③発展論的に導かれた進化論, ④類型論的に比較する普遍史の四つの類型を挙げている. 彼自身は④のヴェーバー的な立場をとりつつも, ハーバーマスなどを参照にして②や③の視点も加えている. vgl. Schluchter, W., Die Entwicklung des okzidentalen Rationalismus—Eine Analyse von Max Webers Gesellschaftsgeschichte, Tübingen, 1979.
- (22) 三浦前掲論文, 71頁の記述を参照のこと.
- (23) Habermas, J., Theorie des kommunikativen Handelns, Frankfurt, 1981.
- (24) Smelser, N. J., Social Change in the Industrial Revolution—An Application of Theory to the Lancashire Cotton Industry 1770-1840, Chicago, 1959.
- (25) Smelser, N. J., "Sociological History: The Industrial Revolution and the British Working-Class Family", 1967, in Essays in Sociological Explanation, 1968. 橋本訳「社会的歴史—産業革命とイギリス労働者階級の家族」『変動の社会学』ミネルヴァ書房所載, 1974年.
- (26) 柳田國男「後狩詞記」『定本柳田國男集第』巻27, 筑摩書房, 1970年, 8頁.

- (27) 鶴見和子「われわれの内なる原始人」『漂白と定住と』, 筑摩書房, 1977年, なお鶴見の最近の研究としては『内発的発展論』鶴見, 川田編, 東京大学出版会, 1989年がある.
- (28) 研究者の内面と対象とする社会の人々に同じ心性を見出そうとする研究は日本でとくに盛んである. この点で日本の社会史の伝統と, フランスのアナール派とでは決定的な違いがあると考えている. アナール派の研究の場合, アンシャン・レジーム期の人間の意識が今日のそれといかに異なっていたのかを明らかにすることで, 今日の人々が常識であると考えていることを相対化するのを社会史研究の課題にしている. 例えばF・アリエスの『子供の誕生』は, 現代の子供観と当時の子供観との差異を強調するものである. これに対し柳田の方法論上の基本タームは「同情」であり, 研究対象に自分自身と同じ心意を見出そうとしている. 同じく民俗的事象に着目したといっても, 両者には大きな違いがあるのである. ここでの区別に従えば, 柳田は文化の連続面に着目するのであるから, 文化論的アプローチに分類できるが, たとえ長期波動に着目したとしてもアナール派には段階論的視点が色濃くあると考える. 因みに日本人のヨーロッパ中世史家である阿部謹也は「同情」を基礎に研究を展開している. (阿部謹也「ヨーロッパ原点への旅」『中世賤民の宇宙』, 筑摩書房, 1977年.
- (29) 中井信彦「史学としての社会史」『思想』No. 663.
- (30) 有賀喜左衛門「日本家族制度と小作制度」『有賀喜左衛門著作集』I, 未来社, 1968年, 19頁.
- (31) 有賀喜左衛門「日本家族制度と小作制度」『有賀喜左衛門著作集』II, 未来社, 1968年, 682頁. なお有賀の方法を参照しながら, 文化論的アプローチを試みた研究として, 拙稿「日本近代化における公と私の意識」1988年, 『慶應義塾大学社会学研究科紀要』第28号, と「『一人前』と『一軒前』——日本における「公」的存在としての権利意識の土壌をもとめて」1989年, 同紀要第29号がある.
- (32) 具体的な研究としては吉原直樹による, 町内会の研究を挙げることができる. 彼は町内会についての戦後の議論の対立点を〈文化型〉論と〈近代化〉論として整理している. 〈近代化〉論が町内会を前近代的なものであり, 近代都市に無用のものと考えのみにたいし, 〈文化型〉論は, 日本の文化の産物として意義をもつと主張するものである. 彼は両者の立場を総合しながら, 地域研究における「生活」の視点を築こうとしている. 吉原直樹『地域社会と地域住民組織——戦後自治会への一視点——』, 八千代出版, 1980年, 第

4 章第 2 節を参照.

- (33) 丸山と同様、段階論的アプローチを代表する大塚久雄も近年、「社会科学における人間」の問題を説き、西欧理論がそのまま非西欧世界にあてはまらないことを認めているのも注目される。大塚久雄『社会科学における人間』岩波新書、1977 年。
- (34) 喜田貞吉「日本社会史の意義」『日本民俗文化体系 5 喜田貞吉』講談社、1978 年。
- (35) 丸山真男「原型・古層・執拗低音—日本思想史方法論についての私のあゆみ—」武田清子編『日本文化のかくれた形』、岩波書店、1985 年。
- (36) 安丸良夫『日本近代化と民衆思想』青木書店、1974 年、22 頁。
- (37) 註の (22) と (27) の文献を参照せよ。
- (38) 文化論的次元を基礎構造としておき、段階論的アプローチが取り扱う社会経済史的な部分を上部構造と考えるような立場は、唯物史観の公式の単なる裏返しになってしまう。そのようにどれかの領域が常に基底にあると考えるのではなく、いくつかの生活領域が相互に影響しあっていると考えるほうが適切であろう。ただしその中で比較的变化の速いものや、政治的な現象のように、変化がはっきりと事件として表れやすいものと、それに比べ、人間の自然への関係や人間関係に対する思念などのようにかなりの長い時間であって変化してゆくものがある。したがって生活の諸領域の間にタイムラグが生じる。文化論的アプローチというのは、政治的な事柄が急激に変化しても、変化しない文化のラグによる履歴効果 (After Effect) を考察の対象にするものである (履歴効果の概念については中鉢正美『生活構造論』、好学社、1956 年を参照せよ)。また「ある繰り返しが別の繰り返しに変わる」機構の研究としては、依然として、中井信彦の『歴史学的方法の基準』(塙書房、1974 年) が最も示唆に富んだ研究である。